

月例研究会（2025年2月2日）

「響けわれらが声——法政大学大
原社会問題研究所所蔵ポスターから見る戦
後の労働者像」 ギャラリートーク

鈴木 貴宇

今回の月例研究会は、私が研究代表を務める
科研プロジェクト「戦後日本における労働者像
の生成と文化に関する総合的研究：サラリーマ
ンの社会文化史」（課題番号：22K01842）の研究
成果として開催したポスター展示の趣旨説明
も併せて行ったものである。清水剛（東京大
学）、榎一江（大原社会問題研究所）の二氏を
分担研究者に、2022年より3年間の計画で研
究を行ってきた。本プロジェクトは、基盤C
ということもあり、3名という小規模で遂行し
てきたが、国際学会（AAS：Association of
Asian Studies）のパネル採択を皮切りに、国
際シンポジウム（於早稲田大学、2024年12月
23日）にはハーバード大学のアンドルー・ゴ
ードン先生に基調講演をお受けいただくなど、規
模以上の成果を挙げることができたのではない
かと研究代表者としては安堵している。

もちろん、それは分担研究者のお二人から頂
いた多大な協力のおかげであることは言うま
でもない。研究成果の社会的還元として、大原社
研が所蔵する戦後の労働運動ポスターを展示す
ることは当初から考えていたものの、ギャラ
リートークという形で多くの人と共有できた幸
運も、こうした予想以上の成果を象徴しよう。

本研究課題は、戦後日本社会における「標準
労働者像」として機能してきた「サラリーマ
ン」イメージが、どのような社会的背景のもと
に生成されてきたかを、文化史（鈴木）、経営

史（清水）、経済史（榎）の領域から考えるこ
とを目的としている。戦後の民主化により身分
格差は限りなく縮小したにもかかわらず、社会
意識としては「労働者」とは考えられないこと
の多い「サラリーマン」の定着と変容を、戦後
史の文脈で可視化できないかという狙いがあっ
た。大原社研が労働運動に関するポスターを多
く所蔵することはよく知られているものの、こ
れまで戦前のものが注目され、戦後のものが大
きくクローズアップされることは少なかったよ
うに思う。大衆化した戦後の労働運動は先鋭的
な表現よりも、通俗的な意匠が目立つようにな
る。それはエリートの運動だった戦前の階級闘
争とは異なる、戦後民主主義の持つ通俗性の中
から生まれた表現でもあった。

今回の展示では40点を選定し、3人の研究
関心で三つのテーマを設けて配置した。展示挨
拶を寄せてくださったゴードン先生が書かれた
通り、一堂に集めるとそこからは「労働者」が
「消費者」の側面を強く持ち出す時期が60年代
だったことが強く浮かび上がる。凛々しく描か
れた女子労働者がマイホームに憧れる主婦や、
内戦に励むパート主婦の像へと集約する様子
は、本展示の見どころの一つだ。

当日のギャラリートークでは、大阪産業労働
資料館館長の谷合佳代子氏もゲスト参加してい
ただき、日曜の開催にもかかわらず、研究所関
係者の方々以外にも足を運んでもらうことがで
きた。展示は東京大学駒場博物館を皮切りに早
稲田大学でも行う。今回のギャラリートークは
駒場博物館で行った。いつもはひっそりと書庫
にしまわれているポスターを、戦前の豊かな建
築の中に素晴らしいキュレーションで配置して
くれた、同博物館の折茂克哉氏にこの場を借り
て万感の御礼を申し上げたい。

（すずき・たかね 早稲田大学文学学術院教授）